

桐壺更衣論：
『源氏物語』と『竹取物語』のあわいに

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横井, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008475

桐壺更衣論

——『源氏物語』と『竹取物語』のあわいに——

一 一つの竹取伝承

ささやかな疑問とこだわりを記すことからはじめよう。

『源氏物語』の発端、我こそはと思いがかる女御・更衣たちをだしぬいて帝寵を一身に集め、剩え「世になくきよらかなるたまのをのこみこ」をもうけた桐壺更衣が嫉妬の集中砲火を浴びて、後宮という女の戦場に戦死する一つの悲劇から開幕する。

その年の夏、みやす所、はかなき心地にわづらひてまかでなむとし給を、いとまささらにゆるさせ給はず。年ごろ、つねのあつしさになりたまへれば、御めなれて「猶しばし心みよ」とのみのたまはするに、日々をもり給て、たゞ五六日のほどにいとよはうなれば、は、君なくくそう「奏」してまかでさせたまつりたまふ。

横 井 孝

(『源氏物語大成』による・八頁)

とある後に続く帝との永別の場面は、この名高い長編の開巻冒頭に位置するだけでなく、悲劇の転帰たる哀傷の情景として記憶されるにふさわしい。「その年の夏……」とあるのは、右の引用の直前、『大成』本文にして四行前に「このみこみつになり給(ふ)年、御はかまぎのこと、一の宮のたてまつりしにおとらず……」(七頁)とあったのを直接に受けての指示語であり、光源氏誕生後三年目の更衣の死を明示する記述であった。

実は、さきに「疑問とこだわり」と称した点は、この「みこみつになり給(ふ)年」のところに存する。あるいは誰もが淡々と通り過ぎる、取るに足りない叙述であるのかも知れない。あるいは、貴族社会の一員として欠くことのできぬ通過儀礼のかずかずの劈頭に、それらを見とどけねばならぬはずの母が夭折することと光の欠

落感の大きさを「みつになり給(ふ)年」が暗示しているのかも知れない。しかし、それでもなぜ更衣の死が三歳時に生起しなければならなかったのだろうか。「みつになり給(ふ)年」は任意の条件であったのか、限定された条件であったのか、という「疑問とこだわり」を私は払拭することができないのである。

ところで、ここに私に連想を促す一つの文献がある。

『聖徳太子伝正法輪』(慶応義塾図書館蔵)という、中世の太子伝記である。⁽¹⁾ その一節、「聖徳太子九歳口伝」なる章は、「昔、欽明天皇ノ御時、駿河国ニ竹作ノ翁ト申ス者有リキ。……竹ヲ最愛シテ家ヲ竹ノ林ノ中ニ作テ侍リケリ。而ニ、軒近キ竹ノ枝ニ鶯ノ卵子ヲ三ツ生メリ。其中ニ金色ノ卵子一ツ有リ。不思議(「議」)ニ思テ、是ヲ取り温メテ七日ヲ過ギテ見侍リケレバ、嚴シキ姫君ナリ」という書き出しの、中世の説話集などに見られる「竹取伝承」の一つである。その中という、

程ナク成人シテ十二三歳ニ成ラレケレバ国司此由ヲ帝王ニ奏聞シ奉ル。時ノ帝ハ人皇三十代欽明天皇ノ御事也。天皇迎ヘ取り御シテ、一ノ后ニ祝ヒ奉リ給ヒキ。寵愛極リ無クシテ、⁽¹⁾三歳ノ春秋ヲ送り給ケレバ、

⁽²⁾御懐任(「妊」)有テ、嚴シキ妃(「姫」)宮ヲ儲ケ奉リ給ヒキ。⁽³⁾ 其後、赫妃、人界ノ機縁尽テ帝ニ別レ奉リ給ケル時、天皇ニ申給様、「我レハ元ヨリ人間界

ノ者ニテ侍ラズ。上界ノ天衆、得道ノ仙女也。君ニ夫妻ノ契ヲ結ビ奉リ、鶯鶯(「鴛鴦」)之衾ノ下ニ比目(「翼」)之語ヲ成シ、鸞鳳之鏡ニ形ヲ並ベ奉ル御事モ宿生之機縁ノ尽キザル間ノ情ケナリ。今ハ下界ノ縁尽テ、天上ニ還住スベシ。君下界ニ留テ朝暮歎給ハム事ノミコソ悲ケレ。自ラ人間ノ思出、後ノ世マデ(ノ)形見ニハ、一人ノ妃宮ヲ残シ留メ奉ル。其外、又永キ世ノ御形見ニハ一面ノ鏡并ニ銀ノカムザシ、金ノ扇等ヲ留置キ侍リ常ニ是ヲ觀覽有ルベシ」トテ、立別レ給ケル。……

のごとき記事は、諸事の竹取伝承と骨子は同じゅうするものの、かぐや姫が懐妊し、帝との間に一人の姫君をもうける展開は、他に類例を見ない。

だが、ここの「赫妃」という表記のかぐや姫と『源氏物語』の桐壺の更衣の境遇は何と似通っていることだろう。(1)帝との三年の歳月、(2)皇子(皇女)の出生、(3)その後の別離という構造的な類比に注目してよいのではなからうか。もとより、誕生するのが「嚴シキ姫君」と「たまのをのこみこ」の差のあること、同じ竹取伝承の中でも皇子(皇女)の出生が類例のないこと、またそれらにも増して『聖徳太子伝正法輪』の成立が鎌倉末から南北朝にかけてと(牧野和夫氏の示教による)かなり時代が下がり、かつ荒唐無稽な内容をはらむ「中世神話」

であることも、ぬきさしならぬ相違として『源氏物語』との安易な比較を阻むであろう。しかし、『源氏物語』と『竹取物語』の関係は、近年に至って論及される頻度が高くなり、一方が他方の一部に影響を与えたのとき皮相論を超えて、総体としての『源氏物語』に『竹取物語』が深く根をおろしているとする意見が交わされている。現況は無視できぬ趨勢があると思われる。そしてさらに、『竹取物語』と中世の竹取伝承とが存外近い距離にあり、『竹取物語』に封じ込められた世界の開示には、荒唐無稽なはずの伝承類がかなり有効な鍵になるとする従前からの私の主張²とを併せれば、右に見た、一見奇矯な、時代を超えた両書の記述の構造的な類比も、あるいは納得のゆく道が拓けるものかも知れない。

二 「影響」ということ

そもそもAなる作品がBなる作品の影響下に成立したことを実証する際には、両作品成立の時間差、表現・構成の近似などをものさしとして、AがBをいかに継承し模倣し、あるいは凌駕してゆこうとしたか、その関係の仕組みを分析してゆくのを常道とする。そこには影響の授受における意義や必然性が問われるべきであろうし、さらにもう一步作品の内へ分け入るステップが用意され

なければならぬはずだ。ただし、両者の関係を具体的に追求しようとする姿勢に固執し、しかも「具体的」なることを履き違えると、表現の類似以深に踏み込むことはむずかしくなる。例えば、『宇津保物語』の第一部、藤原の君の巻以下のあて宮をめぐる求婚譚は、『竹取物語』のその規模を大幅に拡充したものとされるが、影響関係の証拠として具体的な表現の類似を指摘することは、かえってむずかしいし、一箇所二箇所を挙げたところでさほど有効とは思えない。むしろ、「今はやうやう身あつしく侍るに、この手伝へ留めむ事、今は誰にかは」(楼の上の上、角川文庫・二九二頁)と俊蔭女が身近に迫る「昇天」を示唆し、八月十五夜にむけて、秘琴伝授完了を図る物語展開³と併せて、表現を超えた構造の水準で『竹取物語』と『宇津保物語』とがぬきさしならぬ関係にあることを思い到るべきなのだ。だからこそ、『宇津保物語』の現代の諸注——例えば角川文庫の解説(原田芳起氏)や明治書院版校注古典叢書の解説(野口元大氏)など——は、『竹取物語』との関係を疑わないのである。

『源氏物語』と『竹取物語』の関係の場合は、一見『宇津保』のそれよりもさらに話は簡単のように見える。絵合の一場面で「ものがたりのいではじめのおやなるたけとりのおきな、うつほのとしかげをあはせ」(五

六四頁) と言ひ、手習の巻では、いったんは自殺行に奔ったのち救いあげられ、正氣をとり戻した浮舟が激しく受戒を乞う姿に、「かぐやひめをみつけたりけんたけとりのおきなよりも、めづらしき心ちするに、いかなる物のひまにきえうせん」(二〇〇三頁) と尼たちが危惧する場面がある。作者自身が『竹取物語』を撰取したことをこのような形で明記している以上、あれこれ影響關係をあげつらう手間が省ける格好ではあった。しかし、絵合の巻の「ものがたりのいできはじめのおやなる『たけとり』」をめぐって、これを物語文学の始祖と解釈する旧説に対して、初期物語文学の代表的作品を示すに過ぎぬとする新説が出され、両者の議論が交わされ止揚してゆくのと並行して、須磨・明石の流離譚のうちに、御法・幻の紫の上の終焉前後に、あるいは宇治の物語にと、それぞれ『竹取物語』が物語の骨格として組み込まれていることが指摘されるようになってみると、作者の親切はむしろ仇になってわれわれの目を眩しかねない。作者が明示している以上に、『源氏物語』は『竹取物語』を徹底的に吸収しているのではないか。その問いを、以下の桐壺の更衣の形象分析の中で明らかにしてみたいのである。

三 『源氏物語』と『竹取物語』

ところで、『竹取物語』が竹取伝承と切り離せないことは前に触れたが、もちろん両者が全く重なり合うことを意味するのではない。古伝承の世界における難題譚が「解かれるべき難題」としてハッピー・エンドへの前提となるのに対し、『竹取物語』が「解かれざるべき難題」に転調し、昇天の物語に動機づけをしたことをまず挙げることが出来るだろう。しかもこれに連動して、かぐや姫の結婚拒否の問題。古伝承の中には帝との間に一女をもうけたとするものもあることは前々節に挙げた。しかし、物語の難題譚・帝の求婚譚を中世の伝承類に比照してみれば、伝承の基本的な話型をひねり、ずらしたところこそ『竹取物語』作者の「作者」としての創意が見えてくるはずなのだ。『竹取物語』の真価は、それを竹取伝承の中に置いた時にのみより鮮明になるといふことである。と同時に、『源氏物語』に吸収された『竹取物語』は、伝承的記述を含めた総体、——いわばカッコ付きの〈竹取物語〉であったと解釈した方がふさわしいと私は思う。

例の一としては、すでに前々節に『源氏物語』の「みこみつになり給事」と中世伝承の「三歳の春秋」の連関

で挙げた。また、物語においても伝承においても、かぐや姫は昇天して帝と離別するが、「昇天」が一方では「死」を意味することも言うまでもあるまい。かぐや姫昇天の話を『楚辞』『淮南子』に見える「嫦娥奔月」の故事の翻案とする説があるが、一九七二年中国の長沙馬王堆一号墓から出土した帛布にこの嫦娥が描かれていたことも「昇天⁽⁶⁾死」、すなわち『竹取物語』の「昇天」と『源氏物語』の「死」とを結びつける前提の事実として押さえてしかるべきだろう。紫の上や宇治の大君の終焉の場面に『竹取物語』を引くとするのも、従ってゆえなしとしないのである。

さらに、帝に召されたかぐや姫の処遇である。中世の古伝承は言葉少なであるが、明確に共通する点がある。以下に羅列してみよう。

A 帝彼女ヲ召テ御覧ズルニ、実ニ嚴キ貞也。ヤガテ思ヒ玉ヒテ愛シ玉フ事、后ノ如シ。

(古今集序聞書三流抄)

B みめ・かたちのうつくしき、心・言葉もおよばれず。御おぼえやんごとなく、御寵愛ありけるに……

(古今集頓阿序注)

C ……帝ニ奏ス。仍テ后ノ位^(ニ)備リ玉ヒケルガ……

(東大本・和漢朗詠集和談鈔)

D 彼ノ姫ヲ召シテ御覧ズルニ、実ニ叡感浅カラズシ

テ御至愛極マリ無シ。諸ノ后妃・采女皆以テ之ニ及ブコト能ハズ。是クノ如ク三年ヲ送リテ……

(身延文庫本・聖徳太子平氏雜勘文)

(大東急記念文庫本・太鏡底容鈔)

E 天皇迎へ取り御シテ、一ノ后ニ祝ヒ奉リ給ヒキ。

寵愛極リ無クシテ……(前出・聖徳太子正法輪)

——等々。この他にも「美女なれば、やがて思しめして類少きほどなり」(『古今集為家抄』)、「迎へ取りテ后ト成ス」(『法華経鷲林拾葉鈔』)などの類型がある。Bのように寵愛されたとあるときでは、今は問題にはならない。しかし、Aの「后ノ如シ」、Eの「一ノ后ニ祝ヒ奉リ」(特に「一ノ」が冠せられる点に注意)などと称し、さらにDの「諸ノ后妃・采女皆以テ之ニ及ブコト能ハズ」まで敷衍されれば、宮中に召されたかぐや姫の位置は微妙さを帯びざるを得まい。かぐや姫を召す以前の帝には当然有力貴顕の子女が上って后妃に納っていたはずであるし、それは「一ノ」「諸ノ后妃・采女」とあるのによっても示されている。とすれば、予期される「かぐや姫の位置の微妙さ」とは、筆をのばせば、

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ける中に、いとやむごとなきは「際」にはあらぬが、すぐれて時めき給ありけり。はじめより我はと思あがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそ

ねみ給。おなじほど、それより下ろうの更衣たちは、
ましてやすからず。
(桐壺・五頁)

という状況設定に移すことができるのではなかったらうか。『源氏物語』のこと有名な冒頭部には、従来「長恨歌」の影響や『伊勢集』との関係が説かれていたが、影響なるものの多層性がここにも潜在しているといつてよいだろう。

四 桐壺の更衣はかぐや姫である

桐壺の更衣の物語と『竹取物語』の関係でもう一つ忘れてならないのは、鞍負命婦訪問の条である。「長恨歌」「長恨歌伝」による語句が散りばめられ、愛する対象を失った者の悲哀が唐詩の香氣によって豊かに盛りあげられる、印象深い箇所である。「典拠」は露骨に示されているわけだが、「長恨歌」の中でも後半の、道士が天仙となった楊貴妃を訪問する場面であり、そこには神仙的趣味が濃厚に横溢しており、『竹取物語』——あるいは先に述べたとき、総体としての〈竹取物語〉——にもその溪流がそそぎ込んでいることは、早くから指摘があった。⁽⁸⁾「日本の初期物語が神仙思想と関係深かったことはすでによく注意されているが、『源氏物語』の冒頭巻に『長恨歌』や『長恨歌伝』の影響が見られることは、そ

の意味で興味深いので、神仙思想の残滓をそこにみるこ
とができるだろう」と、右の指摘を受けての何げない発
言であったが、もう半歩踏み出せば「長恨歌」を中間項
として『竹取物語』がすでに視程に入ってくるであろう。
従って、〈竹取物語〉と「長恨歌」が表現の上で重なり
合うことは、ごく自然に享受されるはずである。これ
も竹取伝承に例を求めれば、

◇人トナリテ顔ヨキコトタグヒナシ。光アリテ傍ヲ照
ラス。嬋媚タル兩鬢ハ秋ノ蟬ノ翼、宛転タル双蛾ハ
遠山ノ色、一タビ笑メバ百ノ媚ナル。見聞ノ人ハミ
ナ腸ヲ断ツ。……
廻眸一笑百媚生……宛転蛾眉馬前死
(海道記)⁽¹⁰⁾

◇カグヤ姫、天子ノ行幸ニ驚テ、雲鬢花顔頭ハシ、金
鞍銀馬ニシテ忽ニ原中ニ現ジ玉フ。……
(古今集了誉序注)

雲鬢花顔金步揺……雲鬢半偏新睡覺、
(長恨歌)⁽¹¹⁾

◇君ニ夫妻ノ契ヲ結び奉リ、鴛鴦(鴛鴦の誤り)之衾
ノ下ニ比目(翼の誤り)之語ヲ成シ……又永キ世ノ
御形見ニハ一面ノ鏡并ニ銀ノカムザシ、金ノ扇等ヲ
留置キ侍リ。
(聖徳太子伝正法輪)

鴛鴦瓦冷霜花重、旧枕衾誰与共、……空持旧物

アムキケラ
表深情、鈿合釵寄將去、釵留一鈿合一扇、釵壁
黄金合分鈿……在天願作比翼鳥……

〔長恨歌〕

など。「長恨歌」の語句を踏まえて新たな句を創出するものもあつた。更衣の形象は楊貴妃に負うばかりでなく、その裏面に李夫人の姿が張り合わされているとする指摘があるように、桐壺の巻の叙述が典拠たる「長恨歌」を明示していたとしても、〈竹取物語〉依拠の事実を否定することにはなりえない。

——とすれば、作品としての『竹取物語』の次のような例も右と併せて見ておく必要があるのではなからうか。その一が、別離を目前とする二人の女の歌である。

かぎりあらむみちにも、をくれさきだゝじとちぎら
せ給けるを、「さりとも、うちすてゝは、えゆきや
らじ」とのたまはするを、女もいといみじとみたて
まつりて、

「かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほし
きはいのちなりけり

いとかく思たまへましかば」と、いきもたえつゝ、
きこえまほしげなる事はあげなれど……

(桐壺・九八頁)

という更衣のいまわの歌は、帝への「いといみじとみた
てまつ」る気持ちとともに、

今はとて天の羽衣きるおりぞ君をあはれと思ひいで
ける
(岩波文庫による)

というかぐや姫の歌に遡源し収斂してゆくのではないか。さらに加うるに、帝の使者の派遣である。一方は鞍負の命婦であり、他方は内侍中臣の房子であるが、その使者としての首尾はともかくとすれば、対応して差異はなきに等しかろう。いずれも強引な宛て込みは慎まねばならないが、『源氏物語』と『竹取物語』の構造的な類比が看過できないとすれば、些末な事例とは言えないのではないだろうか。

もはや「桐壺の更衣はかぐや姫である」(あるいは正確には「更衣はかぐや姫で(も)ある」か)という、一見奇矯な命題を提示するのに躊躇する必要はなからう。もとより、「影響」「受容」なるものが二作品間の単なるやりとりでない、重層性のあるもの、——例えば、前述のごとく、更衣の造型の中には楊貴妃のほかに李夫人の故事が参与しており、しかも国史上の準拠も一考されねばならない——と承知したうえで、の提言ではある。あるいは百歩ゆずって、桐壺の更衣の造型の中にはかぐや姫の形象を見出すことができる、と言うに留めてもよいのかも知れない。ただ、より重要なのは、桐壺の更衣を認めてよいとすれば、そこを出発点として紫の上、宇治の大君、浮舟と、『源氏物語』全篇を縦に貫く女たちの

中にかぐや姫の姿があるという事実なのだ。島内景二氏は『竹取物語』が書き継がれたとしての思考実験において、帝は「ゆかり」の女を求める「ゆかり」の物語へ、つまり『源氏物語』の形に辿りつくと説いた⁽¹⁴⁾。島内氏自身も気付いて注記しているように、かぐや姫が鶯姫であり竹姫である以上、血族の人間は存在せず、「ゆかり」の物語の可能性は『竹取物語』には当初から閉じられていたのだが、従来とかく皮相で説かれがちだった「影響」という概念におさまりきれぬ連絡が竹取・源氏の両作品にあるのではないか。『源氏物語』の作者が『竹取物語』を料理しきって、なおかつ骨までしゃぶり尽くしたというわけではないか、と私は考えている。この視点は、当然、遠く絵合の巻の「ものがたりのいできはじめのおや」の解釈の如何に拘ってくるはずではあるが、今は「ささやかな疑問とこだわり」に一応の決着をつけたことで満足して筆をおきたい。

注

(1) 牧野和夫氏「慶応義塾図書館蔵『聖徳太子伝正法輪』翻印並びに解説」(『東横国文学』第一六号、一九八四・三)による。ただし、本文引用に際し、句読点・濁点を施すなど、読解に便ならしめた。

(2) 横井「竹取『伝承』と竹取『物語』」(『へ女の物

語』のながれ——古代後期小説史論』加藤中道館、一九八四・一〇刊、所収)。

(3) 須見晴代氏「『宇津保物語』における俊蔭女」(『東京女子大学・日本文学』一九七三・三)。

(4) いちいちの文献については阿部好臣氏「研究の現在」(『国文学』三〇巻八号、一九八五・七)の注記に拠りたい。なお、その後、伊藤博氏「死なぬ薬・

死ぬる薬——竹取と源氏——」(『国語と国文学』六

四巻三号、一九八七・三)、久富木原玲氏「天界を

恋うる姫君たち——大君、浮舟物語と竹取物語——」

(『国語と国文学』六四巻一〇号、一九八七・一〇)

などの発表があった。

(5) 君島久子氏「嫦娥奔月考——月の女神とかぐや姫

の昇天——」(『武蔵大学人文学会雑誌』一九七四・

三)。

(6) 曾布川寛氏「崑崙山への昇仙——古代中国人が描

いた死後の世界」(中公新書・中央公論社、一九八

一・一二刊)。

(7) A・Bは片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題(二)」

(赤尾照文堂)、C・Dは牧野和夫氏の示教による。

(8) 下出積与氏「神仙思想」(吉川弘文館、一九六八・

一一刊)。

(9) 藤井貞和氏「桐壺巻と『長恨歌』」(『講座源氏物

語』のながれ——古代後期小説史論』加藤中道館、

一九八四・一〇刊、所収)。

語の世界・第一集』有斐閣、一九八〇・九刊、所収)

二二頁。

(10) 朝日古典全書による。

(11) 神田本による。太田次男氏「長恨歌伝・長恨歌の本文について——旧鈔を中心にして——」(『斯道文庫論集』第一八輯、一九八二・三) 付載の影印・翻字本文によるが、声点などを省いた。

(12) 藤井貞和氏「源氏物語と中国文学」(『講座日本文学・源氏物語上』至文堂、一九七八・五、所収)。

(13) 『続日本後紀』承和六年六月三十日の仁明天皇女御藤原沢子卒去の条参照。

(14) 島内景二氏「竹取物語の発生基盤——その話型的研究——」(『電気通信大学学報』三五卷二号、一九八五・二)。

(一九八七・一〇・四)